とうきょうすくわくプログラム活動報告書

学校番号	1366718
学校名	日本聾話学校

1. 活動テーマ
＜テーマ＞　4歳児・・・「音・音楽を楽しもう」
＜テーマ設定理由＞
本校は「聴覚主導の人間教育」を教育方針に掲げる私立の聴覚特別支援学校である。障害発見後、できるだけ早期に最良の補聴器や人工内耳を装用し、教育を開始することで、聴くこと・話すこと・歌うことを楽しむ子供に成長する。幼稚部では、あらゆる場面を通し、丁寧なかかわりの中で聴く・話す・歌うことを大切に生活を送っている。
今回、幼児の関心や実態に応じ一定期間活動を行う「トピックス」のテーマに、「音や音楽を楽しむ」を設定した。年中クラス（4歳児）の子どもたちは、障害の程度や聴覚の活用状況に個人差はあるが、おおむね生活の中で音を聴くことを楽しみ、歌にも親しんでいる。「音や音楽」をテーマに楽器に触れることで、子どもたちの世界が広がることを願い、ワークショップをきっかけに活動を展開したいと考えた。そして、ただ音を聞くだけでなく、身近なものをたたいたり、弾いたりして音が出ることに気づいたり、楽器を用いてみんなで音を出し合わせる楽しさも味わってほしいと願った。子どもたちそれぞれの音への気づき、感じ方を大切に、一定期間の活動を設定した。

2. 活動スケジュール
1/23 プロの演奏者による音楽ワークショップをきっかけに、1 月下旬から 2 月中旬にかけて、クラス活動(トピックス)の時間に 9 回、本物の楽器に触れ、楽器を作り、演奏する活動を行った。

3. 活動のために準備した道具や環境の設定
・音楽ワークショップでの様子や活動の様子を写真や文字にし、部屋の後ろに掲示した。いつでも活動をふり返ったり、次の活動への意欲が高まったりすることを願って環境を設定した。

・ダンボール紙　・風船　・ワークショップ時の写真　・楽器の写真、イラスト
・絵の具　・ガムテープの芯　・輪ゴム　・セロハンテープ
・ビニールテープ　・アルミ缶　・ わりばし　・油性マジック
・ストロー　・黒い画用紙　・新聞紙　・養生テープ
・音楽の入った CD　・トーンチャイム　・たいこ（大）　・たいこ（小）

4. 探究活動の実績
〈活動内容〉
9回の実践のうち、報告書では2回目と8回目を中心に取り上げる。

① 【2回目の流れ】
・音楽ワークショップで楽しかったことを伝え合う。
・音楽ワークショップで自分たちが楽器を演奏している様子を短く編集した VTR をみんなで見返す。

② 【8回目の流れ】
・教師が空き缶で作った笛を吹く
・どんな音がしたか伝え合う
・『線路は続くよどこまでも』を歌う
・『線路は続くよどこまでも』で汽笛のように笛を鳴らす
・感想を伝え合う

〈活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり〉

①〈音楽ワークショップの後の子ども達との振り返り〉
T:「昨日のワークショップ、どうだった？」
C3:「トーンチャイムをふるのが楽しいよ。コーン、って聞こえたよ。」
C4:「ぼくは、チャラチャラ―って聞こえた！」
C2:「(えーっ、とトーンチャイムをふるまね)
C1:「(トーンチャイム)いいな。(音が)きれい。」
C6:「(トーンチャイムの)音がきれいで素敵だった。ポーンって聞こえたよ。」
C5:「(バイオリンの音がきれいで)目(が)、ハート。いいなぁ、思ったよ。」
C1・3・4:「目がハート。僕も。」

〈音楽ワークショップで自分たちが演奏している場面のVTR を見た後の子ども達との会話〉
C3:「もっと長く見たかった。」
C1:「(楽器が)ないよー。」
T:「そうなんだよ。C1ちゃんが言ったこと分かった？」
C5:「ないよー。」
T:「そうなんだよ、バイオリンお金高いからないよ。先生もう一度みんながもう一回やりたいかなと思って考えたんだけど…」
C6:「バイオリン作ったら？」

②〈初めて空き缶の笛の音を聴いて〉
T:先生が吹いてみるよ。聴こえるかよく聴いてね
(T がふいてみせる)
C たち:(耳をすませてよく聴く)
T:聴こえる？
C7:電車(の警笛の音)だ！
C6:ポッポー
Cたち:作りたーい。

〈空き缶の笛を作って各々が吹いたところ〉
C3:(ストローをにぎりしめてつばが飛ぶほど息を強く吹いて自分の笛は)鳴らないよ。
C7:鳴った！(自分の笛の音が)聴こえる。
C3:鳴らないよ。
C7:ストローを持たないで優し息を吹くよ。
C3:こう？(優しく吹いてみる)あ、鳴った！

5.振り返り

・音楽ワークショップ中は気づかなかったが、後日改めて写真や VTR で子ども達と振り返ることで、それぞれが感じていたことをことばやしぐさにしていた。また、一人ひとりが意欲的に思いを伝えていて、子どもにとって本物に出合うことがいかに大切かを感じた。
・プロの音楽家による演奏との出合いにより、子ども達が音楽の心地よさや素晴らしさにどんどん魅了されていくのを感じた。振り返りのVTRを見ている時に、自然に子ども達の手がバイオリンを弾いている動きになっていた。また、教師がピッと手を止めるふりをすると各々が勝手に鳴らしていた楽器の演奏をやめようとしていた。音楽ワークショップの演奏者達の姿をよく見ていて共通のイメージを抱いていることを感じた。
・作った楽器を手にしたばかりの時は、とにかく音を出したくて、それぞれが自分の思うままに手作り楽器を吹いていた。その中で、思うように音が出ない時はうまくいっている友達の話に耳をすっとかたむけ、工夫し、友達同士のやりとりが自然と生じていた。
・空き缶の笛の音を出すにあたり、唾が垂れるほど息を強く吹き込み「ストローが取れそう」という子や、吹く息の量が少なくて「聞こえない」と訴えてくる子、息で音を出すのではなく、「フー」と自分の声を出しながら笛を吹いて満足する子等、様々であった。一斉に吹く中で自分の音色が「聞こえない」と気付く様子には驚かされた。吹く息の強さや、ストローの角度、缶やストローの持ち方等、各々が試行錯誤をしていた。苦戦し続けている場合は、教師から「ストローをくわえないで吹いてごらん」等のアドバイスをすることもあった。互いの様子を見合いながら、次第にそれぞれの吹き方が優しく丁寧になっていった。
・聴こえた音について、すすんで「チャラチャラー」「ポーン」等、擬音語で伝え合う姿があった。また音に全員が集中し、よく聴き音を楽しんでいた。補聴器や人工内耳をした本校の子ども達が、空き缶の笛の音を聴いて「電車みたい」と日常の生活で聞く音と結びつけている様子に驚いた。
・『線路は続くよどこまでも』に合わせて空き缶笛を鳴らしたとき、友達と音を出すタイミングが合うと嬉しそうに互いに見つめ合う子ども達の姿があった。